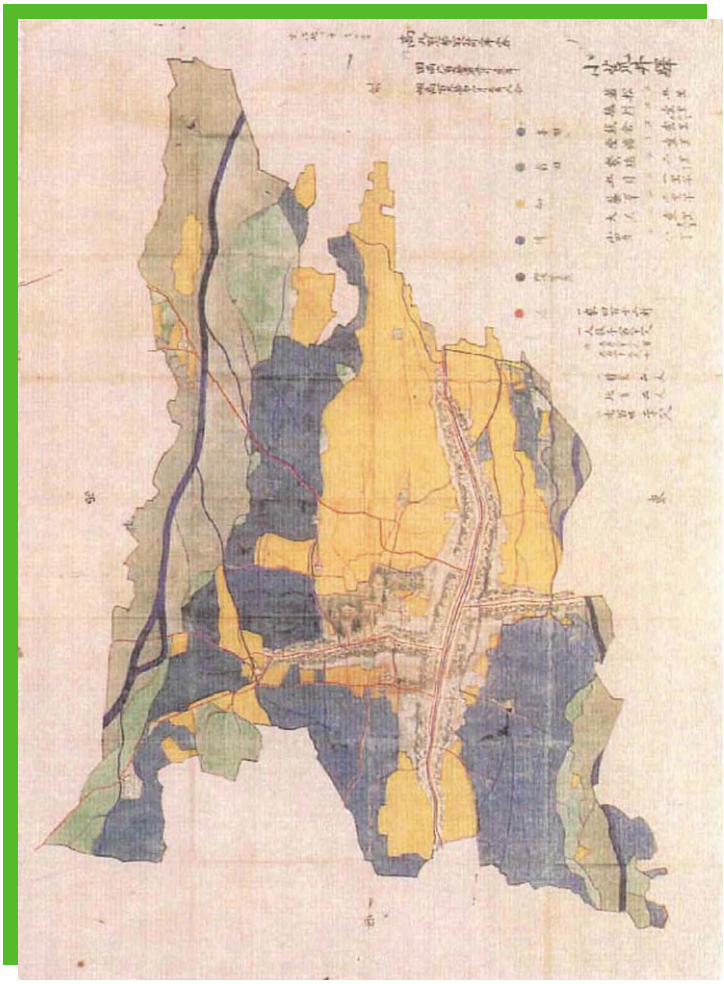
(5)-1近世(江戸時代)

定期市は保護され、喜多方は農村部の都市的空間「在郷町(ざいごうまち)」として発展。

定期市が保護育成される

蒲生氏郷(がもううじさと)は、城と城下町の整備を命じ、武士・商工業者の城下町集住をおしすすめた。一方で、年貢を半石半永(はんごくはんえい)(半分は米で半分は永楽銭で)納めるため、生産物を市場で売る必要が生じ、城下町以外の農村の定期市として、小荒井・小田付などの市が保護育成された。

以後、会津地方では、若松=「城下町」、喜多方=農村部の都市的空間「在郷町」、坂下・野沢=越後街道の「宿場町」として栄えていく。



文化7年(1810)小荒井駅絵図
(資料:喜多方市史)

(5)-2近世(江戸時代)

酒造と醸造業が盛んになる

江戸時代初期から藩が新田開発を奨励したことから、村役人の郷頭(ごうがしら)・肝煎(きもいり)による新田開発が進んだ。

その後、農耕技術の向上により米生産が増加し、年貢の半分を貨幣で納める必要があったため、市場の開設地であった喜多方を訪れる人々を中心に酒の需要があったことから、村役人の郷頭・肝煎や半農半商の在郷商人(ざいごうしょうにん)などの資産家によって、喜多方の良質な湧水を利用した酒造が行われるようになった。

そして麹を使った酒造の技術を応用して味噌や醤油などの醸造業も行われるようになり、この頃から喜多方に醸造のための蔵が建てられるようになる。

北方地方の新田集落
(資料:図説喜多方の歴史)

(5)-3近世(江戸時代)

藤樹学の盛行

寛永20年(1643)保科正之が最上(山形)から会津23万石に入部した。その頃はすでに武断政治から文治政治に移行しつつあった。

徳川幕府は、身分的差別を重視する教学的要素を多分に備えた朱子学を教学の基礎としたが、庶民にとっては観念的で馴染むことができなかったため、実学的な教えである藤樹学が盛んになった。

藤樹学とは、近江国(滋賀県)出身の江戸時代初期の儒学者中江藤樹の教えである。

会津藤樹学は寛文年間(1661～72)に大河原養伯と荒井真庵が、藤樹学の教えを広めていた淵岡山の門をたたき、その後「北方の三子」と言われた五十嵐養安(小田付)、遠藤謙安(上岩崎)・東条方秀(上高額)らにより北方地方を中心に広がっていった。以来、明治初期まで多くの人々によって学び継がれ、北方地方の人々の心の柱となり、会津藩校日新館の教育にも影響を与えた。

中江藤樹先生肖像画

遠藤謙安

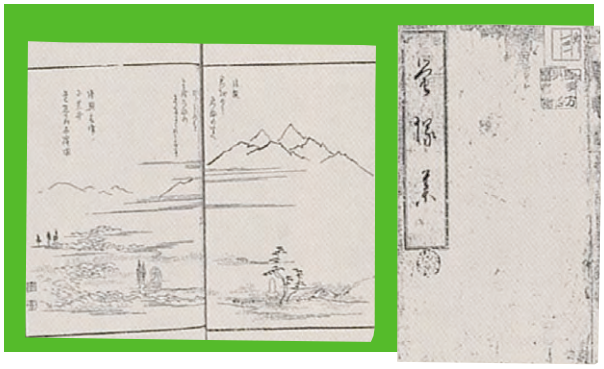
五十嵐養安

(資料:図説喜多方の歴史)

(5)-4近世(江戸時代)

庶民文化の興隆

文化・文政期(1804～63)には、肝煎などの村役人や酒造業者を中心に富裕な農民・商人層が成長し、庶民文化として俳諧がさかんになる。若松城下町や会津各地の俳人たちはもちろん、本宮・福島・仙台の俳人とも交流して「北方俳壇」を興隆させた。



蛍塚集(伊藤朶年　編)

河上集(関本如髪　編)

会津俳諧百家集(伊藤朶年　編)

(資料:図説喜多方の歴史)

(5)-5近世(江戸時代)

喜多方地方の戊辰戦争

文久2年(1862)、会津藩最後の藩主である松平容保(まつだいらかたもり)は、尊皇攘夷派が横行する京都の状況に手を焼いている幕府から京都守護職に任命された。容保は、新撰組を指揮下におき、京都の治安維持を担ったことなどから、薩長軍が圧勝した鳥羽・伏見の戦いの後、幕府方として追討されることとなる。

会津軍は、初戦では善戦するものの、慶応4年(1868)7月29日二本松城の落城の頃から戦況が悪くなり、侵入してきた新政府軍に同年8月23日鶴ヶ城を囲まれた。会津平野が戦場と化し、喜多方でも9月中旬には戦いが繰り広げられ、官軍の退路を断つため小田付は焼かれた。容保は、孤立無援の中で一ヶ月に及ぶ戦闘に耐えつづけ篭城したが、9月22日ついに落城した。

北方地方の戦争経過図
(資料:図説喜多方の歴史)